

## まえがき

高野泰志

ヘミングウェイ作品における宗教モチーフの研究は、これまで決して盛んになされてきたわけではない。これはヘミングウェイ研究における奇妙な空白であると言わざるをえない。なぜならヘミングウェイ作品のタイトルを概観するだけでも、『我らの時代に』(*In Our Time*, 1926), 『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926), 「身を横たえて」(“Now I Lay Me,” 1927), 「世の光」(“The Light of the World,” 1933), 「よのひと忘るな<sup>1</sup>」(“God Rest You Merry, Gentlemen,” 1933) など、聖書や賛美歌からとられたタイトルが数多くあり、『我らの時代に』の間章や「革命家」(“The Revolutionist,” 1925), 「今日は金曜日」(“Today Is Friday,” 1927), 「賭博師と尼僧とラジオ」(“The Gambler, the Nun, and the Radio,” 1933) など宗教をテーマにした作品は無数にあるからである。とりわけニック・アダムズ (Nick Adams) やその他の主人公たちが作品中で祈る姿はおびただしい数にのぼる。

にもかかわらず、今日にいたるまでヘミングウェイと宗教というテーマがあまり取り上げられることがなかったのは、研究者によるふたつの先入観の結果であると考えられる。ひとつには、カーロス・ベイカー (Carlos Baker) から最初期の伝記研究がヘミングウェイのカトリック改宗を、2人目の妻ポーリーン (Pauline Pfeifer) と結婚するための「名目上」(Baker 185)の改宗であると考えた(したがって1917年にイタリアの戦場で受けた洗礼は考慮に入れられず、1927年が改宗の年とされる)ことが挙げられる。離婚と結婚にまつわる実際的な理由があったことが、改宗の動機として不純であると考えられたのである。

またもうひとつの大きな原因は、第一次世界大戦後のモダニズムの文学運動を取り巻く状況である。モダニストたち先進的なエリート文学者たちにとって、そして未曾有の大量殺戮を目の当たりにした人々にとって、もはやそれまで通り神の存在を確信することなどできず、神は死んでいたのである<sup>2</sup>。そして実存的世界観がモダニズムの文学に浸透した結果、その文学運動の中心に位置し、「失われた世代」を代表すると見なされたヘミングウェイもまた、神を信じていたはずがないという先入観で見られることになったのである。

たとえばフィリップ・ヤング (Philip Young) は『我らの時代に』のタイトルが祈祷書 (*The Book of Common Prayer*) からとられていることを指摘し「祈祷書をあざ笑うような意図があったことはほとんど間違いない」と述べている (30) <sup>3</sup>。

しかしヘミングウェイはその「あなた方はみな失われた世代なのです」というガートルード・スタイン (Gertrude Stein) の言葉を『日はまた昇る』のエピグラフに用いながらも、それに対抗させるように「世代など移ろいゆく一時的なものに過ぎない」という『伝導の書』をそれに並べて置き、そこから『日はまた昇る』というタイトルをとった<sup>4</sup>。この点を見るだけでも、ヘミングウェイを実存的で信仰を失った 20 年代文学者の一員としてひとくくりにすることがいかに危険であるかが分かるはずである。

ヘミングウェイの宗教観に関しては、いまだにペイカーやヤングの初期研究の枠組みから逃れられていないのが現状である。多くの伝記が実存主義的ヘミングウェイ像を前提にしているために、この方面に関して本格的に追求した研究者はきわめて少ないのである。著書の形としてはジュランヌ・イザベル (Julanne Isabelle) が最初のものであるが、事実関係においても解釈に関しても、問題の多い研究であり、信頼に値しない。ラリー・グライムズ (Larry Grimes) の初期作品の宗教性と美学に関する研究が数少ない例外的著書として挙げられるが、それ以外には H・R・ストーンバック (H. R. Stoneback) の一連の論文が長らくこの分野では孤軍奮闘してきた。しかしストーンバックはヘミングウェイの信仰心を所与の前提とするあまり、作中の多くの要素を信仰心の表れとして解釈しすぎるきらいがあり、指摘の重要性は認められるものの必ずしもそのすべての解釈が納得のできるものではない。近年マシュー・ニッケル (Matthew Nickel) の研究が単著として出版されたが、この著作はストーンバックの説をなぞっただけのものであり、それ以上の見解が提示されていないという点で、この分野に関心のある読者を大きく失望させるものであった。

本特集では、4 人の研究者がヘミングウェイの宗教観に関する研究の不足を問題視し、それぞれの方向からこの主題に取り組んでいる。ヘミングウェイがカトリックに改宗する直前に書いた『日はまた昇る』を取り上げ、特に宗教の近代化をめぐる大きな問題となる第 12 章を出発点とする。作中のさまざまな宗教モチーフに言及しながら、主人公ジェイク・バーンズ (Jake Barnes) の宗教観、そしてひいては作者ヘミングウェイの宗教観にまで迫っていきたい。

## 註

\*なお、本稿および以下の4つの論考は、日本ヘミングウェイ協会第24回全国大会(2013年12月22日)でのシンポジウム「宗教の近代化とヘミングウェイ——『日はまた昇る』の12章を出発点に」をもとにしたものである。

- <sup>1</sup>ヘミングウェイ協会の定訳では「神よ陽気に殿方を懇わしめたまえ」と訳されているが、ここではあえて独自訳とした。これは英米で非常によく知られた賛美歌第2編128番の冒頭のフレーズであるが、“rest”は現代英語の用法とは違い、“keep”の意味で用いられているので、少なくとも「懇わしめたまえ」という意味ではない。また“gentlemen”に呼びかけている原文がなぜか神に呼びかけていることになっている変更も不可解であり、そもそも祈願文ですらないという意味で、この定訳は明らかな誤訳である。キリスト教圏ではこのフレーズを聴いた段階で、無意識に続くフレーズ“Let nothing you dismay. / For Jesus Christ our Savior / Was born upon this Day.”が連想され、クリスマスを思い起こすのである。文化的背景に親しみのない日本人にはそのまま訳しても誤解を招くだけであり、ここでは賛美歌タイトルの教会定訳として「よのひと忘るな」とした。この賛美歌タイトルに親しんでいる日本人は多くはないであろうが、次善の策とした。
- <sup>2</sup>このあたりの文学的状況に関してはCowleyを参照。
- <sup>3</sup>祈祷書の該当箇所は「神よ、我らの時代に平和を与えたまえ」であり、『我らの時代に』の短編群が暴力に満ちあふれていることを根拠にしている。
- <sup>4</sup>当初は*The Lost Generation*もまたタイトルの候補として挙げられていたが、それが最終的に現在のタイトルに落ち着いたこと自体、時代の虚無的状况に対するヘミングウェイの姿勢の変遷を示しているように思われる。

## Works Cited

- Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Scribner's, 1969.
- Cowley, Malcolm. *The Literary Situation: An Informal History of Our Literary Times*. New York: Viking, 1954.
- Young, Philip. *Ernest Hemingway: A Reconsideration*. New York: Harbinger, 1966.
- ヘミングウェイと宗教に関する文献リスト
- Berman, Ron. “Protestant, Catholic, Jew: The Sun Also Rises.” *The Hemingway Review* 18.1 (1998): 33–48.
- Buske, Morris. “Hemingway Faces God.” *The Hemingway Review* 22.1 (Fall 2002): 72–87.
- Grimes, Larry. “Hemingway’s Religious Odyssey: The Oak Park Years.” *Ernest Hemingway: The Oak Park Legacy*. Ed. James Nagel. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1996. 37–58.
- . *Religious Design of Hemingway’s Early Fiction*. Ann Arbor: UMI, 1985.
- Isabelle, Julanne. *Hemingway’s Religious Experience*. NY: Chip’s, 1978.
- Nickel, Matthew. *Hemingway’s Dark Night: Catholic Influences and Intertextualities in the Work of Ernest Hemingway*. Wickford: New Street, 2013.
- Stoneback, H. R. “‘For Bryan’s Sake’: The Tribute to the Great Commoner in Hemingway’s *The Sun Also Rises*.” *Christianity & Literature* 32.2 (Winter 1983): 29–36.

- . “From the Rue Saint-Jacques to the Pass of Roland to the ‘Unfinished Church on the Edge of the Cliff.’” *The Hemingway Review* 6.1 (1986): 2–29.
- . “Hemingway and Faulkner on the Road to Roncevaux.” *Hemingway: A Reevaluation*. Ed. Donald R. Noble. Troy: Whitston, 1983. 135–63.
- . “In the Nominal Country of the Bogus: Hemingway’s Catholicism and the Biographies.” *Hemingway: Essays of Reassessment*. Ed. Frank Scafella. NY: Oxford UP, 1991. 105–40.
- . “‘The Priest Did Not Answer’: Hemingway, the Church, the Party, and *For Whom the Bell Tolls*.” *Blowing the Bridge: Essays on Hemingway and For Whom the Bell Tolls*. Ed. Rena Sanderson. New York: Greenwood, 1992. 99–112.
- . *Reading Hemingway’s The Sun Also Rises*. Kent: Kent State UP, 2007.